第2章　質的調査法をどう教えるか
ICU「質的社会学分析」の実践紹介

1　はじめに

本章では、ICUの「質的社会学分析」において質的調査法をどのように教えているのかについて具体的に紹介する。第1章では、ICUの社会学教育全体の概要と「質的社会学分析」の位置づけについて紹介した。ここではシラバスにそって授業内容を論じるとともに、授業を円滑に進めるための資料についても紹介する。資料は付録として巻末に掲載しているので参照されたい。2節「授業の構成とスケジュール」では、本クラスの構成とスケジュールを紹介する。3節「実習の展開」では、授業においてどのように実習を運営しているのか、教育スタッフが行っているさまざまな工夫を含めて具体的に紹介していく。4節「おわりに」では、本クラスでの経験を踏まえリベラル・アーツ教育を実践する小規模な大学で質的調査法の実習クラスを運営する際のポイントについて論じる。

2　授業の構成とスケジュール

本クラスの目的は、履修生がインタビュー法を中心とする質的調査法を理解し身につけることにある。授業は主に講義と実習から構成される。履修生は、講義をとおして質的な社会調査の発想と技法を学ぶ。そのうえで、調査計画から調査実施、分析、そして論文の執筆に至る実習を通して、発想と技法を習得していく。表1と表2に示すように、20週間の授業は、春学期2つ、秋学期3つのモジュールにわけられる。「質的社会学分析Ⅰ」では、「発想の理解」（第1モジュール）、「技法の習得」（第2モジュール）、「質的社会学分析Ⅱ」では、「データの収集」（第3モジュール）、「データの分析」（第4モジュール）、「研究結果のとりまとめ」（第5モジュール）により構成される。「質的社会学分析Ⅰ」においては講義の割合が大きいのに対して、「質的社会学分析Ⅱ」においては実習の割合が相対的に大きい。本節では、シラバスにそってどのように授業を展開しているかを解説していく。

2.1　第1モジュール「発想の理解」

第1モジュール「発想の理解」では、1週目から3週目の授業で、質的研究の特性を理解すること、先行研究レビューの重要性を理解すること、分析課題と調査設計について理解することという3つのトピックに取り組む構成となっている。1週目は、質的調査法の特性を量的調査法と比較しながら説明をする。特に、量的調査法と比較した場合の質的調査法の特徴、インタビューや参与観察といった質的調査法のさまざまな技法、質的研究の認識論などについて講義をしている。講義後、履修生は自己紹介を行う。自己紹介は1人あたり数分程度で、調査したいテーマや関心のある社会現象などについて発表するようにしている。授業外の作業としては、翌週までに関心のある調査テーマについてA4用紙1枚でまとめてくるよう求めている（提出課題1）。

表1：質的社会学分析Ⅰシラバスの構成（春学期）

モジュール	週	講義	実習	授業外の作業
①	第1週	・クラスの概要 ・質的調査の概要	・自己紹介	・関心のあるテーマについてのレポート執筆 （提出課題1：2週目に提出）
①	第2週	・先行研究	・グループ分け	・先行研究の探索
①	第3週	・分析課題の設定、調査研究の流れ、データとは何か、調査対象者の設定など	・分析課題と調査対象者について議論	・個人別先行研究リストの作成 （提出課題2：4週目に提出）
②	第4週	・半構造化インタビュー、参与観察、フィールドノートの作成など ・依頼状	・分析課題と調査対象者について議論 ・依頼状の準備 ・先行研究リストのとりまとめ	・依頼状作成（提出課題3：5週目に提出） ・質問リストの作成 ・グループ別先行研究リストの作成 （提出課題4：5週目に提出）
②	第5週	・フィールドに向かうための準備、予備調査	・質問項目についてのディスカッション	・予備調査の開始（8週目まで）
②	第6週	・データを生成すること（トランスクリプトの作成）	・進捗状況にあわせたグループワーク	・トランスクリプトの作成 （提出課題5：後日提出）
②	第7週	・研究・調査倫理	・進捗状況にあわせたグループワーク	・中間報告用レジュメの作成 （提出課題6：9または10週目に提出）
②	第8週	・調査計画書	・調査計画書についてのディスカッション	・調査計画書の執筆 （提出課題7：後日提出）
②	第9週		中間報告Ⅰ	—
②	第10週		中間報告Ⅱ	—

表2：質的社会学分析 II シラバスの構成（秋学期）

モジュール	週	講義	実習	授業外の作業
③	第1週	・クラスの概要 ・調査計画書の講評	・調査計画書の合評会	・依頼状ならびに質問リストの修正 （提出課題1：第2週に提出）
③	第2週	・質的データの分析法	・進捗状況にあわせたグループワーク	・調査の開始（第6週目まで）
④	第3週	・コーディング	・コーディング作業	・トランスクリプトの作成 （提出課題2：後日提出） ・コーディング／分析の開始
④	第4週	・分析から解釈へ	・コーディング結果の解釈と分析課題の関連についての議論	・コードと分析課題の関連を説明するレポート （提出課題3：第5週に提出） ・グループ発表用レジュメの作成 （提出課題4：第5週に提出）
④	第5週	・分析の進捗状況についてのグループ発表	・質問項目のディスカッション	・論文初稿執筆開始（提出課題5：第7週に提出） ・最終発表用レジュメの作成 （提出課題6：第9週に提出）
⑤	第6週	・研究成果のとりまとめ、論文スタイルガイド	・論文のアウトラインについてのディスカッション	—
⑤	第7週	・ワークショップ	・進捗状況にあわせたグループワーク	・論文初稿への教育スタッフからのフィードバック
⑤	第8週	・論文の加筆修正	・調査計画書についてのディスカッション	・論文初稿の加筆修正
⑤	第9週		最終発表 I	—
⑤	第10週		最終発表 II	・論文を執筆（提出課題7:後日提出）

2週目には、学術研究における先行研究レビューの位置づけとその重要性、文献の探索法などを紹介している。先行研究を十分にレビューし、自らの問題関心をこれまでなされてきた類似の研究と関連付けることは、学術研究においてきわめて重要な作業である。素朴な問題関心を社会学的な研究課題へと練り上げていくプロセスにおいて、先行研究レビューがいかに重要であるかについて理解を得ることは重要である[1]。実習では、提出課題1をもとにグループ編成を行う。また、履修生による授業外の作業として、この週から先行研究の探索がはじまる。

3週目には、質的な調査研究のプロセス全体について改めて講義で説明する。なかでも、分析課題の立て方とその課題に対して適切な調査対象者をいかにして設定するか、という点について講義で詳しく説明する。実習では、各個人が調べてきた先行研究などの情報をグループメンバーと共有しながら、分析課題と調査対象者についてグループごとにディスカッションをする。また、授業外の作業として、翌週までに個々人が最低5つの先行研究を探し出してくることを求めている（提出課題2）。

2.2　第2モジュール「技法の習得」

第2モジュール「技法の習得」では、インタビュー調査の技法について学び、秋学期に行う調査に向けての準備を、4週目から8週目までの間に行う。9週目と10週目にグループごとに、これまでの成果と秋学期に行う調査の計画をクラス全体の前で発表する。

まず、4週目と5週目には、本クラスにおいて採用する半構造化インタビュー法について、調査計画から調査実施にいたる各段階においてどのような作業を行うのかを講義で説明する。4週目には、本章3.2で詳述するような質問リストと依頼状（付録3）の作成方法について講義で説明する。また、フィールドノートの取り方についても講義で説明する。5週目には、調査対象者と接する際のマナーやラポール形成について、また、図1で示す具体的なインタビューそれ自体のプロセスについて講義で説明する。履修生による実習と授業外の作業は、依頼状と質問リストの作成に移る（提出課題3）。さらに、各個人が探索してきた先行研究リストをもとに、グループでの先行研究リストを作成する（提出課題4）。この課題では、先行研究をテーマごとに分類し、それぞれの内容を要約してくるよう求めている。依頼状と質問リストが完成し次第、予備調査を開始する。

インタビュー開始のプロセス	インタビュー中	インタビュー終了のプロセス
・あいさつと自己紹介 ・調査倫理の説明 ・研究課題についての説明 ・録音許可の取得	・敬語の使用 ・謙虚な態度 ・ラポール（信頼関係）の構築 ・相手が考える時間を確保 ・反論したり、自分の意見は極力抑える	・分析レポートの希望の有無 ・郵送先の確認 ・雑談を快くひきうける ・感謝して退出 ・礼状の準備と送付

図1：インタビューのプロセス

[1] なお、「社会学的研究へのアプローチ」においても、ICU図書館職員が文献探索の方法について説明する時間を設けている。そこでは、OPACや各種データベースの利用方法に関する説明が中心となっている。

次に、6週目には、データの種類、データの特性とその収集方法などについて講義で説明する。あわせて、インタビュー調査から得られる音声をデータ化する方法としてトランスクリプトの作成法についても講義で説明する。本章3.3で詳述するように、本クラスでは共通の「トランスクリプション・ルール」（付録8）を設けることで履修生が作成するトランスクリプトのクオリティを一定のレベルにするという方策をとっている。予備調査のインタビューデータをもとに作成したトランスクリプトは後日、課題として提出することになる（提出課題5）。実習では、各グループの進捗状況にあわせて自由に時間を使えるようにしている。そのため、予備調査のための質問リストの改訂や先行研究の再検討をするグループもあれば、インタビューのトランスクリプション作業を行うグループもある。

そして、7週目には、調査倫理と研究倫理について講義で説明している。調査倫理については、日本社会学会の倫理綱領[2]あるいは社会調査協会による社会調査倫理規定[3]などを参考にしている。具体的には調査対象者の権利の保護という観点から、調査対象者の自発的な参加、プライバシーの保護、情報の秘密保持、インフォームド・コンセントの重要性について説明し、履修生には調査倫理への遵守を求める。また、研究倫理については、学術研究においては、データの捏造、剽窃が固く禁じられていること、そして、そうした事態が発覚した場合は、単位取得を認めないという方針も伝えている。

なお、本クラスでは、調査倫理に関連して調査対象者に2つの条件を設けている。1つ目の条件は年齢が18歳以上であることである。その理由は子どもへの調査は非常に難しいということと、18歳未満は保護者の承認が必要だと考えられるからである。2つ目の条件は調査対象者が初対面であるということである。また、ICUの学生を対象とすることも認めていない。知り合いを調査対象にしてしまうと、親しいがゆえに聞きたいことが聞けなかったり、詳しく聞き取らなくても対象者の言いたいことがわかってしまい、深く質問することができないままデータ化してしまう可能性があったりなどという、オーバー・ラポールの問題があるからである。質的調査を行うことの意義は、自分とは異なる環境で生活を送っている人々に話を聞くことにある。初対面の人にインタビューを行うことで、実習の効果を最大限に得ることができるのである。

7週目の実習では、第6週と同じく各グループの進捗状況にあわせて自由に時間を使えるようにしている。トランスクリプト作成が終了しているグループは予備的な分析もかねて、インタビュー結果について議論する。そして9週目以降の中間発表に向けたレジュメの作成を開始する（提出課題6）。

8週目には、春学期末に提出する「調査計画書」（提出課題7）について講義で説明する。調査計画書については形式を整えるとともに、内容の充実をはかるために「調査計画書スタイルガイド」[4]という執筆のルールを設けている。8週以降、春学期末の中間発表と調査計画書の執筆にむけてそれぞれがグループで作業することとなっている。

9週目と10週目にはクラス全体で中間発表を行う。各グループは分析課題、先行研究、調査の概要、予備調査の結果、秋学期の調査計画からなるレジュメを構成し、1グループあたり20分を目安に発表する。発表後には質疑応答の時間が20分程度設けられる。各グループは履修生や教育スタッフからの質問やコメントに答えることで、自分たちの設定した分析課題や先行研究の妥当性を判断したり、アイデアを深めたりしていくことで、調査計画書を執筆していく。そして、春学期終了時に調査計画書

---

[2] 日本社会学会，2005，「日本社会学会倫理綱領」（2012年10月26日取得，http://www.gakkai.ne.jp/jss/about/ethicalcodes.php）

[3] 社会調査協会，2009，「一般社団法人社会調査協会倫理規定」（2012年10月26日取得，http://jasr.or.jp/content/members/documents/rinrikitei.pdf）

[4]「調査計画書スタイルガイド」は，付録9に所収した「質的社会学分析 論文スタイルガイド」から「質的データの引用」を除いたものである。

を提出する。ここで夏期休暇に入るため調査は一旦中断される。なお、教育スタッフは秋学期が始まる前に、調査計画書に対してコメントすることでグループに今後乗り越えるべき課題を提示する。

2.3 第3モジュール「データの収集」と第4モジュール「分析」

秋学期の第3モジュール「データの収集」では、本調査として4名程度のインタビューを行うという課題に取り組むことが中心となる。第4モジュール「分析」では、春学期にインタビューした2名と本調査の4名、あわせて6名程度のデータを分析するという課題に取り組む。

1週目には、本調査に向けての準備作業を行う。まず、事前に受け取った調査計画書に対する教育スタッフからのコメント内容をグループ内で共有し、今後の方向性について検討する。さらに、2つのグループでペアを組み、それぞれ相手のグループの調査計画書を読み、相互にコメントをしあうという合評会を実施する。合評会では、他グループの調査計画書を読み、コメントすることで、他グループの良い点を学ぶことができる。そしてその他グループに向けたコメント自体が自分たちのグループでも守らなければならないものと自覚する契機になる[5]。また、どうしても「教える―教わる」という権力関係が生じる教育スタッフと履修生の間と異なり、フラットな関係にある他グループからコメントや批判を受けることは教育効果も大きい。これらの作業を行うことで、本調査に向けての課題を洗い出し、その解決策を考えることができる。履修生は、予備調査の結果や教育スタッフならびに他グループからのコメントを踏まえ、依頼状と質問リストを修正する。

2週目は各グループの進捗状況に合わせて、依頼状ならびに質問リストの修正をしたり、先行研究を追加で探索したりする。3週目は春学期に作成したトランスクリプトを実際にコーディングし、その経過をクラスで口頭発表する。授業外の作業としては、依頼状ならびに質問リストの修正が終わったグループから本調査を開始する。インタビューを実施したグループはトランスクリプション作業を行う（提出課題2)。また、随時コーディングと分析を開始する。

4週目は、コーディングの結果を論文としてまとめる作業について講義で説明する。実習では、引き続きコーディング作業を継続すると同時に、コーディングの結果を分析課題とどのように関連づけてゆくのかという点から議論をする。授業外の作業としては、コードと分析課題の関連を説明するレポートを執筆する（提出課題3)。また、翌週の中間発表に向けレジュメを作成する（提出課題4)。5週目は講義を行わず、分析の進捗状況について、特にコードと分析課題の関係という観点から、グループ別に発表する。発表には教育スタッフのみならず他のグループの履修生からのコメントも求める。履修生は、この週から論文初稿（提出課題5）の執筆と最終発表会のレジュメ（提出課題6）の作成を開始する。

2.4 第5モジュール「研究結果のとりまとめ」

第5モジュール「研究結果のとりまとめ」では、分析した結果を論文としてまとめるという課題に取り組む。このモジュールでは6週目に簡単な講義をした後、授業時間をすべて論文完成にむけた実習と発表にあてる。

---

[5] 例えば、相手のグループに対して「参考文献リストのスタイルが適切ではない」とコメントする履修生がいたとしよう。コメントした当事者はそのようにコメントしたからには、自分もまた参考文献リストの作成をより適切なスタイルで行おうと自覚するようになる。これは相手に向けたコメントが自分にも返ってくることを意味している。その意味で、こうした合評会は教育効果が高い。

6週目には、論文執筆の方法について講義で説明する。具体的には、春学期同様、履修生らに論文執筆の指針として準備した「質的社会学分析 論文スタイルガイド」（付録9）について解説する。また、7週目には論文の執筆方法についてワークショップを開催している。このワークショップでは、提出された論文初稿を全員で読み合わせたのち、教育スタッフと他の履修生がコメントする。初稿は、内容面でも形式面でも完成度が低いことが多く、相互批判の機会を設けることで加筆修正の方向性を見つけられるようにしている。なお、8週目は、前週に得られたコメントを参考にしながら論文を加筆修正する時間にあてている。そして、9週目と10週目にはクラス全体で最終発表を行う。各グループは研究の背景、調査テーマ、先行研究レビュー、分析課題、データ分析方法、分析結果、解釈、結論についてのレジュメを構成し、1グループあたり20分を目安に発表する。春学期の中間発表と同じく発表後には質疑応答の時間が20分程度設けられる。そして，ここで得られた教育スタッフならびに他のグループの履修生からのコメントをもとに論文（提出課題7）を完成させる。

3　実習の展開

質的調査法の発想と技法は座学でのみ身につけられるものではない。やはり、実際に調査を行い、分析し、その結果を論文としてまとめる作業なくして、それらを体得することはできない。そこで本節では、実習を「テーマの設定とグループ作成」、「分析課題の設定と調査準備」、「インタビュー調査」、「分析と論文執筆」の4つのフェーズにわけて、具体的にどのように実習を行っているのかを説明していく。

表3：「質的社会学分析」実習のスケジュール

春学期	4月	テーマ決定とグループ作成、先行研究の開始
	5月前半	テーマと対象者を絞り込み、分析課題を構成
	5月後半	依頼状と質問リストの作成、対象者とのコンタクト、予備調査実施
	6月	トランスクリプション、授業内での中間発表、調査計画書の作成
		夏休み
秋学期	9月	依頼状と質問リストの改訂、対象者とのコンタクト、本調査実施
	10月	データの作成（トランスクリプション）、データ分析
	11月	授業内での最終発表、論文執筆
	12月	対象者送付のための論文の改訂、論文の送付

実習の大まかなスケジュールは、表3に示す通りである。まず、授業冒頭に学生の問題関心に基づき、グループ編成を行う。4月中は、先行研究レビューを行いながら、分析課題を洗練させる。5月に入ってから、「質問リスト」と「依頼状」を完成させ、2名程度の予備調査を行う。6月には、予備調査から得られた音声データを起こしたトランスクリプトをもとに今後の調査の方向性について議論をし、秋学期に向けた「調査計画書」を作成する。9月に、「質問リスト」と「依頼状」の内容を精査したのち、本調査として4名程度のインタビューを行う。インタビューから得られた音声データは、すべて文字おこしをする。10月から11月にかけて、作成したトランスクリプトを基に分析を行う。最

後に、2万字程度の論文を執筆し、20週間の授業は終了する。さらに、授業終了後に、教育スタッフのコメントをもとに論文の加筆修正を行い、年末までに調査対象者に論文を送付するのが慣例となっている。

3.1 テーマの設定とグループ作成

「質的社会学分析」では、例年30名程度の履修生を、1グループあたり3、4人をめやすに9グループ程度にわけ、それぞれのグループを担当するTAを決めている。グループ編成以降、実習の各段階における指導は担当TAが中心となって行うことになる。グループ編成作業は、興味関心の近い学生たちをまとめることを基本に、授業運営をスムーズに行うためにいくつかの点に気をつけながら行う。これについては第3章で詳述する。また、TAの担当グループの割り振りも各TAの専門分野と各グループのテーマとの関連性をもとに決定している。通常、1人のTAが3グループ、計10名程度の学生を担当することとなる。各TAは、教員や他のTAに対して頻繁に進捗状況を報告したり、指導方法について相談しており、1人で指導業務を抱え込まないようにしている。

グループ編成を行うにあたって、教育スタッフが学生の興味関心を適切に把握することは、その後の授業運営をスムーズに行うにあたってきわめて重要であると同時に、きわめて困難な作業である。履修生は、前述の「社会学的研究へのアプローチ」やその他の専門科目を受講しているとはいえ、3年生になったばかりであり、自らの関心を形にし、それらを他者と共有するという作業は簡単ではない。また、履修生の数だけ、興味関心も存在するため、それを1つの分析課題としてまとめるのは、困難を極める。そこで、「受講者票」（付録2）を活用している。受講者票は、履修生との連絡を授業外にも行えるようにするために、連絡先（メールアドレス）を尋ねるものである。加えて、教育スタッフが履修生の問題関心を把握するために、社会学に関する科目の履修歴や、読書経験、学内外での課外活動、関心のある社会問題や社会現象などをアンケート形式で書き込んでもらうことにしている。ただし、連絡先については記入必須項目としているが、それ以外の項目への記入は学生の自由にまかせている。受講者票と提出課題1は教育スタッフにとって、履修生の問題関心を知るために重要なものとなっている。なお、具体的なグループ作成プロセスについては第3章にて詳述する。

3.2 分析課題の設定と調査準備

テーマとグループが決まったら、素朴な問題関心を社会学的な分析課題へと練り上げなくてはならない。履修生は先行研究レビューの執筆と、依頼状ならびに質問リストの作成をグループで取り組む。先行研究レビューについては第3章で詳述するため、ここでは依頼状ならびに質問リストの作成プロセスについて説明する。

「質的社会学分析」では、調査対象者にインタビューを依頼する際、「インタビュー調査のご協力のお願い」（以下、依頼状）（付録4）を渡している。先行研究レビューが、問題関心を研究史のなかに位置づける作業だとすれば、依頼状の作成は、グループの問題関心を分析課題として他者にもわかるよう簡潔にまとめなおす作業といえる。

依頼状では、①分析課題についての情報開示、②調査者が国際基督教大学の学生であること、③「質的社会学分析」という授業の一環で調査を実施しているということ、④責任は調査者である履修

生にあるが、最終的な責任は教員が負うということ、⑤調査対象者の権利（答えたくない事柄について答える義務がない旨など）を調査対象者に伝える。また、グループで作成する依頼状の他に調査に関するよくある質問とその回答をまとめた「調査に関するQ&A」（付録5）を補助的な説明資料として調査対象者に渡す。このようにインフォームド・コンセントを得た上で、インタビュー調査を実施するというステップを踏襲している。この依頼状が完成しない限り、調査対象者にコンタクトをとらないようにと指導をしている。

依頼状は教育スタッフが準備したひな形を使用しており、「各グループの調査内容を説明するパート」、「授業の説明など全グループに共通するパート」、「連絡先」の3つからなる。グループで取り組むのは「各グループの調査内容を説明するパート」の文面の作成である。その文面は「調査グループ名」、「調査題目」「調査目的」、「調査対象者」、「質問内容」を穴埋めすることで作成することができる。こうしたひな形を利用するのは、調査対象者に対して失礼のない文面である必要があること、履修生は初めての調査経験であるため、自分たちで文面を作成すると時間がかかりすぎてしまうことなどの理由による。

依頼状の作成プロセスには「グループによるテーマの明確化」と「グループの進行状況把握」という2つの機能がある。前者は、依頼状の作成プロセスを通じて学生たちが自らの研究テーマを明確化する契機となるということである。先に述べたように、依頼状は調査グループ名、調査題目、調査内容、調査対象者、主な質問項目などを通じて、学生たちの研究テーマを簡潔かつ明瞭に説明するものである。これらの項目を確定していくその作業が、まさに研究テーマを明確にしていく過程でもある。依頼状を作成する過程で、学生たちは同じグループのメンバー同士、議論を交わし、自らの問題関心を他者とも共有可能なものとして練り上げていくことになる。

後者は、依頼状の作成プロセスを通じて教育スタッフが各グループの進捗状況を把握する契機となるということである。依頼状は、順調に研究が進んでいるかどうかのメルクマールとなるのである。依頼状作成が遅れているグループがあれば、担当TAを中心に様々にサポートをしていくこととなる。ここでのTAの役割は、グループごとに提出された依頼状案（提出課題3）をもとに、グループメンバーの問題関心を聞き取りながら、調査対象者に渡すことができる質になるよう、口頭でアドバイスをすることである。あくまで調査の主体はグループなので、実際の書き直し作業はメンバーに任せるようにしている。グループの問題関心を社会学的に位置づけ直すこと、さらに、それを他者と共有可能な形にすることの手助けをするということが依頼状作成プロセスにおけるファシリテーションのポイントとなる。

依頼状の作成と同時に、インタビューの質問リストも作成する。「質的社会学分析」では、半構造化インタビュー法を採用するため、ある程度、フォーマライズされた質問リストの作成を履修生に求めている[6]。質問リストを作成する作業は、履修生自身が中心に行い、TAはあくまでアドバイザーに徹している。アドバイスは、分析課題を具体的な質問項目へと落とし込むという内容面と、よりよいインタビューを行うための一般的な技法面の2点から行う。内容面については、提出された質問リストをもとに、担当TAが履修生たちとミーティングを行い、指導する。技法面については、以下に示

[6] 半構造化インタビューは、質問リストを用いることで、インタビューの方向性、方針や質問内容の概要は決められているが、それ以外に調査対象者が語りたい内容、あるいはインタビュアーがその場の対話の流れに合わせて、基本的な方針の尊重や人権への配慮を怠らない範囲で質問を変化させることが可能である（萱間 2007）。萱間真美は半構造化インタビューが質的データを収集する際に最も用いられる頻度が高いとしている（萱間 2007）。なお、構造化インタビューとはインタビューの質問項目や順序が細かく決められているものである。これは量的調査の質問紙調査で用いられる手法である

すような質問の類型について説明したり、別のグループの履修生とインタビューの練習をさせることを通じて指導する。インタビューの練習から、答えづらい質問の有無の確認や質問の順番の入れ替えなどについて示唆を得られることが多い。

3.3　インタビュー調査

依頼状と質問リストが完成したら、インタビュー調査を開始する。「質的社会学分析」では春学期に予備調査として2名程度のインタビュー、秋学期に予備調査の結果を基に依頼状と質問リストを修正した上で、本調査として4名程度のインタビューを行っている。本クラスでは、調査プロセスも一定の形でフォーマット化されており、すべてのグループが同じプロセスをたどって調査できるよう設計されている。依頼状が完成し、担当TAの了解を得たグループから調査対象候補者への連絡を取る。その時点で、表4に示す調査備品を用意する。

表4：インタビュー調査備品一覧

・依頼状	・名刺（個人の名前が入ったもの）
・「調査に関するQ&A」	・録音機器（ICレコーダーとカセットレコーダー）
・封筒（依頼状と「調査に関するQ&A」を封入）	・カセットテープ
・お礼状	・電池（録音機器用）
・お礼状用封筒	・ボールペン
・お礼状用切手（80円）	・フィールドノート用メモ

履修生は、調査対象候補者がいる場所に直接出向いたり、電話、電子メールなどのさまざまな連絡手段を使ったり、個人や団体からの紹介を受けたりして、調査対象者のアポイントメントを獲得する。アポイントメントが獲得できたら、調査依頼の手続きとして、依頼状と「調査に関するQ&A」を調査対象者に渡す。そして、依頼状と「調査に関するQ&A」を調査対象者に読んでいただき、調査の趣旨に理解していただいてから、インタビューを行うことになる。インフォームド・コンセントはこのようにして徹底されるのである

インタビュー調査は基本的に2人1組で行い、1人がメインのインタビュアー、もう1人がメモによる記録とサブのインタビュアーを務める。2人1組で行うのは主に2つの意味がある。ひとつはインタビュー自体に関するものである。それは、メインインタビュアーが質問に詰まってしまったり、質問すべきことを忘れてしまっていたりするときに、サブインタビュアーが手助けする役割をもつからである。もうひとつは不測の事態に備えるためのものである。これは履修生の安全確保の意味が大きいが、1人が何らかの事情でインタビューに行けなくなってしまうことや遅刻してしまうこともある。上記の理由から、本クラスでは2人1組で調査を行うようにしている。

録音についてはインタビューの冒頭に調査対象者の許可を得た上で行う。録音機器はICレコーダーとテープレコーダー各1台を使用し、これらはクラスから貸し出している。録音データはグループによるトランスクリプションの作成が完了するまでは履修生が管理し、その後は教育スタッフが厳重に管理することになっている。なお、録音データは秋学期が終了した時点で廃棄される。

インタビューが終わったら、調査対象者に対して、調査に協力していただいた感謝の気持ちを込め

「お礼状」[7]を書き、当日中に郵送することにしている。

以上の調査プロセスは、各段階において、その作業を担当した履修生からその他のグループメンバーと担当TAにメールで報告される。報告の方法やタイミングについては「調査インストラクション」(付録6) としてまとめられている。例えば、調査対象者からインタビューへの協力が得られたときに行われる「面接アポイントメント報告」では、(1) 対象者氏名、(2) 対象者の所属や属性、(3) 対象者連絡先 (電話番号、メールアトレス、住所を必ず聞く)、(4) アポをとった交渉日時、交渉したメンバー氏名、(5) どのような交渉を経てアポをとったか、(6) 待ち合わせ日時、(7) 待ち合わせ場所、(8) 予定調査員氏名 (その氏名を対象者に伝えてあるかということも)、(9) 特記 (交渉窓口か対象者と異なる場合に交渉窓口となった相手の氏名、事前の対象者からの希望・コメントなど) といった情報を報告することになっている[8]。これによって担当TAはどこで誰が、どのような調査対象者に対してインタビューを行っているかを把握することができる。他方、履修生にとってこのような報告を行うことは、調査対象者についての正確な情報を知ること、調査の日時や場所などを確認することという2つの意味で重要である。そしてなにより、履修生自身が社会調査は適切な手続きを経て行わなければならないということを認識することが重要なのである。

こうしたメールでの報告内容は、確実な情報共有と個人情報保護の観点から授業で配布されたフィールドノート用メモ帳と各グループの班長ならびに担当TAが調査中に保有する「調査管理カード」(付録7) に転記することになっている。個人情報保護のためプライバシー情報を含んだメールは、その内容を転記した時点で削除することになっている。

インタビュー終了後は、速やかにトランスクリプション作業にとりかかる。学生がそれぞれ自由にトランスクリプションを行うと1つのトランスクリプトの中で表記の揺らぎが生じたり、複数のトランスクリプトの間に表記のズレが生じたりする。このため、本クラスでは社会学的データとして適切なトランスクリプトの作成を行えるように「トランスクリプション・ルール」(付録8) を設けている[9]。トランスクリプションをルール化したことの意図は、インタビューの内容をできるだけ忠実に再現するということと、とのメンバーか読んでもインタビューの内容を等しく理解できるように表記するということを手助けすることにある。

先述したように、本クラスではインタビューを2人1組で行う。そのため、トランスクリプション作業はインタビューに参加した2人が分担して行うか、あるいはどちらかが1人で行うか、ということになる。インタビューに参加しなかった他のメンバーが行うことはできない。それは語りにあらわれない調査対象者の表情やその場の状況を説明できないからである。「トランスクリプション・ルール」を使うと、状況説明や語彙説明、言葉の補足などさまざまなルールによってインタビューの状況を表現することができる。このルールはインタビューに参加した2人が、参加しなかった他のメンバーにもインタビューの内容を忠実に伝えることができるように、そしてすべてのメンバーがインタ

---

[7] 「お礼状」にはICUの絵はがきを用いている。学内の風景を映した春夏秋冬の4種類の写真を用意していて、履修生が自由に選べるようにしている。

[8] 履修生からの「面接アポイントメント報告」に不備があった場合は、担当TAから逐一確認のメールを送る。

[9] 伊藤勇によれば、トランスクリプトをどの程度まで詳しくするかは研究目的によって異なるため、唯一の正しい記録はというものは存在しない (伊藤 2008)。本クラスの場合、履修生たちは質的調査の初心者であり、また、研究目的もあいまいなまま調査に赴くこともあるので、どの程度まで詳しくトランスクリプションを行えばよいのかわからない状態にある。トランスクリプトの基準をクラスで統一するのはこういう理由にもとづいている。桜井厚は、共同調査によってデータを共有する場合などはトランスクリプション・ルールを定めることを推奨している (桜井 2002)。本クラスで行う調査はグループで行うものであり、共同調査に類するものだと言えよう。

ビューの内容を等しく理解することができるようにするためのものなのである。

この「トランスクリプション・ルール」は講義でクラス全体に説明する。その際、ルールを参照してトランスクリプションを行うように伝えている。トランスクリプションが完了したら、各グループはトランスクリプトを教員と担当TAに提出する。そこで、教員と担当TAはトランスクリプトのなかに大きな表記のズレはないか、調査対象者を特定可能にしてしまうようなプライバシー情報がないか、については確認している。しかし、時間的な制約からトランスクリプトのすべてをチェックすることはできない。トランスクリプトが社会学的なデータとして適切なものとなるかどうかは履修生にまかされる。われわれが作成した「トランスクリプション・ルール」は先述の「調査インストラクション」とは異なり、(プライバシー情報を匿名処理することを除いて) 厳格に定められたルールではない。このルールは適切なデータを作成するためのアイデアなのである。したがって、どの程度この「トランスクリプション・ルール」を適用するかは、グループで判断することになるのである。

3.4 分析と論文の執筆

「質的社会学分析」では6名程度へのインタビューという限られたインタビューデータを分析することで論文を執筆していかなければならない。そこで、本クラスではグループディスカッションを通じて、履修生個々人がデータを分析する能力を身につけられるような工夫を行っている。それは1人で卒業論文を執筆する能力を身につけることにつながっていくのである。

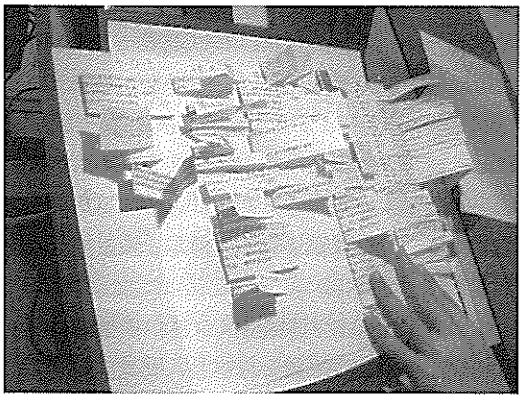
このような考えから、第4モジュール「分析」で行われる授業は分析方法についての講義とデータ分析の実習に分けている。本クラスは5、6、7限の連続開講であるため、5限を講義の時間にあて、6、7限を実習に使うというように授業内容によって時間を自由に配分することができる。したがって、第4モジュール「分析」では、前半の講義で分析方法を説明するとともに課題を提示し、後半の実習ではグループディスカッションによるインタビューデータのコーディングとその成果の発表を行う。

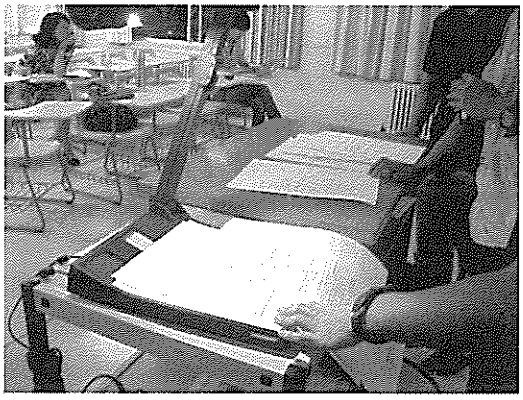
本クラスでは佐藤郁哉のいう天下り式のコーディング法を発展させている (佐藤 2002)。佐藤は調査データの分析におけるコーディングをエスノグラフィーの記述をより分厚くかつ体系的なものにしていくために、現場作業を通して蓄積されてきた膨大な資料を何度も読み直し、その作業を通じて浮かび上がってくるいくつかのテーマを整理していくこととする。その上で佐藤は、コーディングにはあらかじめ用意されているリストの中のコードを対象にあてはめていく「天下り式」のコーディングと、フィールドノーツやインタビューデータの分析と整理を進めていく中で、コードおよびコードのリストを作り上げていく「たたき上げ」のコーディングの2つがあるとする。佐藤は質的なコーディングは後者の性質を持つものだとしている。質的な調査においては「たたき上げ」のコーディングを採用するのが望ましいと思われる。

しかし、本クラスでは限られた期間の中で、6名程度のインタビューデータをもとに分析を進めていかなければならない。そこで、履修生たちは調査設計段階で調べた先行研究を参考にしながらある程度コードの枠組みを設定した上で、インタビューデータを分析するのである。コーディングは抽象度のレベルを3つに分けることから始まる。もっとも抽象度が高いのが分析課題に関連するコードである。第2のレベルのコードは、分析課題を操作化した各質問項目をいくつかのグループにまとめたものである。第3のレベルのコードは、各質問項目に対する答えが中心となる。

このコーディング作業に際して、各グループに模造紙、はさみ、大量の付箋、ペン、スティックの

りを用意する。下の写真で示したように、トランスクリプト上の「語り」をはさみで切り取り、模造紙にのりで貼っていくのである。履修生たちはトランスクリプトを読み、第1のレベルと第2のレベルに関連して重要だと思った「語り」を切り取っていく。切り取った「語り」がある程度集まると、それらを当初想定していたコードに合わせて分類していく。さらに、切り取った調査対象者の語りの中で言及されている事象や時間、場所など、あるいは自らが依拠する理論の観点などからそれぞれの語りにコードをつけていく。これが第3のレベルのコードにあたる。例えば、語りを第1のレベルと第2のレベルへと分類していく際に新たなコードやカテゴリーを作り出したり、語りに第3のレベルのコードをつける際に、複数の語りを合体させたコードを作るといったように当初想定したコードの枠組みを変更することも頻繁に行われる。つまり、本クラスでは「天下り式」のコーディングを採用しつつも、「たたき上げ」のコーディングの特長である、新しいコードをつくり出しながらコーディングを進めていく方式を採用しているのである。





履修生によるコーディングの作業と発表の様子

半構造化インタビューにおいては、問いと答えが常に一対一の関係にあるわけではないし、調査者が明らかにしたいものを直接、調査対象者に問いかけるわけではない。たいていの場合、調査者が投げかけた問いにたいする調査対象者の応答は、調査者の予想をこえて広がっていく。そして、トランスクリプトを分析する時点において、はじめて問いへの答えが明確になるということが多い。コードの分類の指針は、質的社会調査の経験がない履修生がスムーズに分析を行えるよう設けるものである。したがって、佐藤がいうような「天下り式」のコーディングにとどまるものではない。本クラスで採用しているコーディングの方法からは、より具体性を高めていく過程で新しいコードやカテゴリーが生まれてくるのである。

以上のような3つのレベルからコードを作り出すという視点でトランスクリプトを眺めてみることの目的は、今後の分析の視座を得ることにある。履修生たちはこうしたコーディング作業を通じて、インタビューで聞き取った内容をコード化し、そのコードをカテゴリー化することで自分たちの分析のプロセスを視覚的に示すことができる。

また、コーディング作業を行う実習はグループディスカッションだけで終わるのではない。履修生には、授業の最後にグループディスカッションの成果をクラス全体に向けて発表することを求めてい

る。1グループあたり数分程度の時間の発表であっても、事前に告知しておけば履修生のディスカッションを行うことへのモチベーションがあがる。加えて、グループでの発表を行うことで、教育スタッフが各グループの進行状況を把握することもできる。さらに、グループディスカッションによる分析作業を繰り返すことで、分析の精度が向上していく。実習で行われるグループディスカッションの成果は論文の分析部分の原形となっていく。

そうして履修生たちは学期末の論文をグループで執筆する。「質的社会学分析」では、履修生たちが書き上げた論文は基本的に調査にご協力頂いた方々へ送付することになっている。そのため、たとえ実習クラスの論文であっても、内容はもちろん形式においても、学術論文としての一定の質を確保していることが求められる。そこで、論文を書き上げる数週間前に草稿の提出を求め、担当TAを中心に添削作業を行っている。

担当TAは内容と形式の2点から添削作業を行う。まず、内容については次のような基準をもとにしている。調査テーマに社会的意義や社会学としての意義はあるか、自分たちの調査テーマを先行研究の蓄積のなかに位置づけられているか、先行研究同士は論理的につながっているか、先行研究は分析課題の設定に結びついているか、分析課題と分析は対応しているのか、分析におけるデータの解釈は妥当か、分析における新しい知見は何か、調査による発見は何か、その発見は面白いか、発見をもとに理論化をしているか、研究の限界や課題が示されているかなどのさまざまな基準である。TAが履修生の論文にどれだけのレベルのものを要求するかは、各グループの進捗状況と締切までの時間を鑑みながら個別に対応をしている。上記のすべての基準を満たしているものもあれば、そうでないものもある。基準を満たしていない場合でも、履修生自らが掲げた分析課題に対して何らかの答えを示していればよいとする場合もある。

次に、形式については次のような3つの基準をもとにしている。1つ目は論文全体の構成に関する基準である。論文は序論で始まり、先行研究を積み上げながら、分析課題を提示し、データの収集方法を明示した上で、分析を行い、結論を示す。担当TAはこのように論文が適切に構成されているかどうかを判断する。2つ目は読みやすい文章の構成に関する基準である。項目立てや行空けのルールから、3章の5.3で詳述する「文章の書き方」と「論文の体裁」、「論文の論理的なつながり」までを基準としている。3つ目は論文としての信頼性に関わる基準である。これは引用・参照のルールにもとづくものである。具体的には、参考文献リストは正確であるか、文献注や図表は適切に挿入されているかを基準に添削を行っている。

この論文の形式のうち、引用・参照のルールと参考文献のルールについては日本社会学会が刊行した「社会学評論スタイルガイド」を用いている。それ以外のルールについてはTAが作成した「質的社会学分析 論文スタイルガイド」（付録9）を用いている。このスタイルガイドは、わかりやすく、読みやすい文章を書くという指針をもとに、論文の構成、文章のスタイル、項目立て、注、参考文献、引用、図表などについてのルールを設けている。両スタイルガイドは適切なスタイルで論文を書くことを意図して、履修生に配布し、講義形式で説明している。この両スタイルガイドに準拠することで、グループメンバーが分担して執筆したとしても論文全体のスタイルを統一させることができる。また、両スタイルガイドを説明することで、履修生が冒しがちなミスを未然に防ぐことができる。そしてなにより、両スタイルガイドを徹底することは履修生個々人が論文を書く技術を身に付ける手助けになるのである。

そうして、履修生たちはグループで1つの論文を執筆することになる。論文のなかには20週間で書かれたものとは信じられないほどのクオリティのものがある。教育スタッフにとって、高いクオリティの論文が提出されることは望外の喜びである。こうして秋学期の最後に提出された論文は、教育スタッフによって改めて添削される。ここでの添削の目的は、調査対象者に送付できるものにすることにある。添削が終わった論文は必要に応じて、履修生たちによって書き直しされ、担当TAの監督のもと、調査対象者に送付される。

4　おわりに

これまで「質的社会学分析」のクラスの概略について、クラスのスケジュールに沿いながら説明した。最後に本クラスの10年あまりにわたる経験を踏まえて、リベラル・アーツ教育、あるいは小規模大学において、質的調査法を教授する際におさえるべきポイントについて3点論じたい。

第1に、クラスのさまざまな部分、特に調査実習のプロセスをフォーマット化するという方策についてである。質的調査法という方法論を学びながら、実習を行い、その結果を論文としてまとめるということは、すなわち大量の作業を行うことを意味する。このためには、クラスの各段階でなすべき作業の内容を明確にする必要がある。そして明確にしたものがきちんと共有されるためにも、文章の形にするのがよいと考え、「質的社会学分析」ではさまざまな書類を作成し、実習で活用している。調査実習のプロセスをある程度フォーマット化することで、抽象的な思考のプロセスを、目に見える形で示し、履修生の学びを手助けしている。

第2に、調査実習のプロセスをフォーマット化すると同時に、その各段階においてはただフォーマット化された方法に沿うだけでなく、実質的に意義のある作業を行うようにしなければならない。例えば、先にフォーマット化された依頼状について説明した。これは、グループ名、調査題目、調査対象者、主な質問項目などをただ埋めれば自動的に出来上がるというものではない。これらの項目を決定するためには、先行研究を読み、グループ内でディスカッションを行い、履修生自身が研究テーマについて考え抜く必要がある。また、このプロセスにおいて教育スタッフが適切な距離をとりながら見守ったり、時には踏み込んでアドバイスをしたりする必要も当然ある。つまり、質的調査法を教授する際には、クラスをフォーマット化する必要があるが、同時にその内容が形骸化しないよう履修生のコミットメントを引き出す必要があるのだ。

第3に、人員、予算、教材等の保管やミーティングのための教室の確保など授業を運営するための体制を整える必要がある。フォーマット化されたクラス運営をスムーズに行うという形式的な面でも、調査実習を有意義なものにするという内容的な面でもTAの果たす役割は大きい。複数名のTAを確保することは質的調査法の実習クラスにおいて必須である。私たちの経験では1人のTAが担当できる履修生の上限は10名程度、3グループまでである。また、TAの人件費以外にも、文具や調査備品を毎年必要分購入するための予算が必要である。ここでは詳細は述べないが、履修生に録音器具を貸し与えるのであれば、その購入や修理には多少のまとまった金額が必要である。

さらに、授業を行う教室の他に、授業外の時間にも自由に使える教室が必要である。「質的社会学分析」では、授業が行われる場所と同じ建物のなかにある「社会学セミナールーム」という教室を利用している。この教室は社会学メジャーの履修生と関連する授業のTAのための教室である。ここに

はPC、鍵付きの書類棚やキャビネット、社会学の関連書籍、ミーティング用の机や椅子などが用意されている。質的調査法の実習クラスでは対象者や履修生の個人情報を扱うため、厳格な情報管理が求められる。個人情報は基本的には持ち運ぶことはせず、鍵付きの書類棚またはキャビネットに保管している。また、セミナールームは履修生同士のディスカッションや教育スタッフ間のミーティングなどにも用いる。社会学関連の図書は、履修生に貸し出しをしている。

1章で論じたように、社会調査士協会による社会調査士資格の設立以降、質的調査法の実習クラスの標準化が進んでいる。また、協会に調査テーマを事前に申請する必要がある以上、そこでは教員が調査テーマを事前に提示せざるを得ない。この場合、複数の教員が同時に複数のクラスを開講したり、自校の大学院生を大量にTAとして動員したりすることが多いようだ。このようなクラスの運営スタイルは、社会学メジャーの教員の数が限られており、社会学を専攻する大学院生が少ないICUではなかなか困難である。その他のリベラル・アーツ・カレッジや小規模大学でも同様の困難があるだろう。しかしながら、小規模大学でも履修生の自発性を尊重するモデルを採用し、先にあげた3つのポイントを踏まえた上でクラスを設計すればレベルの高い質的調査法の実習クラスを運営できるのではないか。長年にわたるICUの質的調査法の実習クラスの経験から、私たちはそのように考えている。

参考文献

伊藤勇，2008，「質的インタビュー調査の再概念化」『福井大学教育地域科学部紀要 Ⅲ（社会科学）』64: 1-31.

萱間真美，2007，『質的研究実践ノート――研究プロセスを進めるclueとポイント』医学書院.

桜井厚，2002，「ライフヒストリー・インタビューの技法」白谷秀一・朴相権編『実践はじめての社会調査――テーマ選びから報告まで』自治体研究社，162-70.

佐藤郁哉，2002，『フィールドワークの技法――問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社.